

平成22年度文部科学省委託事業「青少年体験活動総合プラン」
企画事業「**学校長期自然体験活動指導者養成研修**」

- ◆期 日 平成22年10月9日（土）～10月11日（月）【2泊3日】
- ◆会 場 国立能登青少年交流の家
- ◆対 象 青少年教育関係者，学校教育関係者，その他自然体験活動に興味・関心のある方で，自然体験活動指導者として登録する意志のある18歳以上の方。40名。
- ◆参加者 44名（大学生37名，社会人7名）
- ◆講 師 宗倉 啓（福井大学教授）
松本 謙一（富山大学教授）
水沢 利栄（福井大学准教授）
齊藤 一彦（金沢大学准教授）
羽咋消防署
国立能登青少年交流の家企画指導専門職
- ◆主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立能登青少年交流の家
- ◆後 援 新潟・富山・石川・福井・滋賀各県教育委員会

1 趣 旨

農山漁村における農業体験や自然に親しむ体験活動等の教育的効果を高めるとともに，青少年が安心・安全に体験活動を実施できるようにするため，青少年の体験活動を指導したり，小学校が実施する体験活動に対して助言・調整を行ったりする指導者を養成する。

2 ねらい

- ・ 小学校が実施する長期自然体験活動の全体指導者として，必要な知識や技能を養う。
- ・ 研修内容や参加者同士の交流を通して，全体指導者としての自覚を高める。



実習『自然体験活動の技術：ウォークラリー』



演習『プログラムの企画・立案』

3 日程

10月9日 (土)	午前	○受付 9:30・開講式 10:00 ○講義「学校教育における体験活動の意義」 講師：福井大学 宗倉 啓
	午後	○実習「体験活動の指導法：アイスブレイク」 指導：交流の家職員 ○実習「自然体験活動の技術：いかだ体験・アーチェリー」 指導：交流の家職員 ○講義・演習「体験活動の指導法」 講師：金沢大学 齊藤 一彦 ○実習「自然体験活動の技術：ナイトアドベンチャー」 指導：交流の家職員
10月10日 (日)	午前	○実習「体験活動の指導法：体験学習法」 指導：交流の家職員 ○講義・演習「安全管理」 講師：福井大学 水沢 利栄
	午後	○実習「自然体験活動の技術：野外炊飯」 指導：交流の家職員 ○講義「教育課程と体験活動の関連性」 講師：富山大学 松本 謙一 ○講義・演習「プログラムの企画立案」 講師：富山大学 松本 謙一 ○交流会
10月11日 (月)	午前	○講義・演習「プログラムの企画立案（グループ発表）」 講師：富山大学 松本 謙一
	午後	○実習「救命救急法」 講師：羽咋消防署 ○閉講式 16:40

4 成果と課題

(1) 事前・事後アンケートによる事業評価

事業評価を目的とし、参加者44名を対象に調査を実施した。調査項目は、事業内容に対応した項目を含めた28項目を使用した。

受講前を事前とし、受講後を事後として回答を依頼した。その平均値の比較を図に表したものが、図1である。

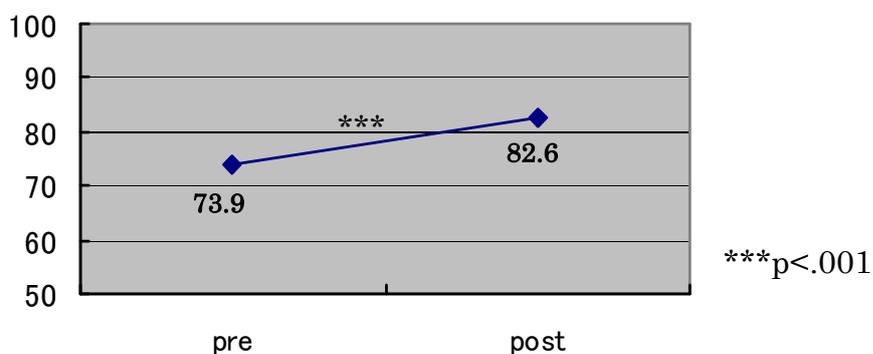


図1 事前事後における平均値の比較（全項目）

図1でも明らかのように、0.1%水準で有意に平均値が事後に向上した。したがって、本事業に参加したことで、参加者に何らかの変容が見られ、平均値が向上したと考えられる。

そこで、具体的に、本事業のどのような要素が参加者に変容をもたらしたのかを調べるために、28項目の調査項目を、本事業のねらいにそって3つのグループ(表1)に分けた。

表1 調査項目のグループ分け

第1グループ:対人関係	第3グループ:精神的・社会的自立
3 他者との関わりを大事にする。	1 努力をおしまずに、自分のできることに向かって完全燃焼する。
5 他人と争うようなことはしたくない。	2 自分のもっている潜在的可能性を追求しつづける。
8 何事も人間一人の力で出来るものでないから、お互いの協力を大事にする。	6 自分のやることに最善の努力を尽くす。
10 周囲の人と利害関係ををはなれた付き合いをする。	11 時間や物を無駄にしない。
13 他人には誠実な心をもって接する。	14 事実をわだかまりなく、さっぱりと受け入れる。
15 他人をないがしろにしない。	16 今という時を大切にする。
20 自分の欲望のためには他人に迷惑をかけても構わない。	17 何事も自分のことは自分でやる。
第2グループ:自己肯定感	18 自分のやるべきことは責任をもってやり遂げる。
4 過去の失敗をくよくよ後悔しない。	19 自分自身にこだわりをもたない。
7 自らを創造・開発していく。	21 義務や責任を進んで果たす。
9 何かに失敗しても混乱したり絶望したりしない。	22 自分の中に好まない面を見つけたら、隠すよりも良くしていこうとする。
12 将来に希望と期待をい込んでいる。	23 出来るだけ多くの物事を見聞きしようとする。
24 自分自身の行為に自信をもっている。	25 何か自分の出来ることに専心(専念)する。
27 かけがえのない生命を精一杯生きる。	26 何事にも興味と好奇心をもって接する。
28 自分のよい面は否定せず素直に受け入れる。	

表1に示したように、第1グループを「対人関係」、第2グループを「自己肯定感」、第3グループを「精神的・社会的自立」と命名した。そして、それぞれのグループにおける平均値を算出し、事前事後で比較した結果を図2に示した。

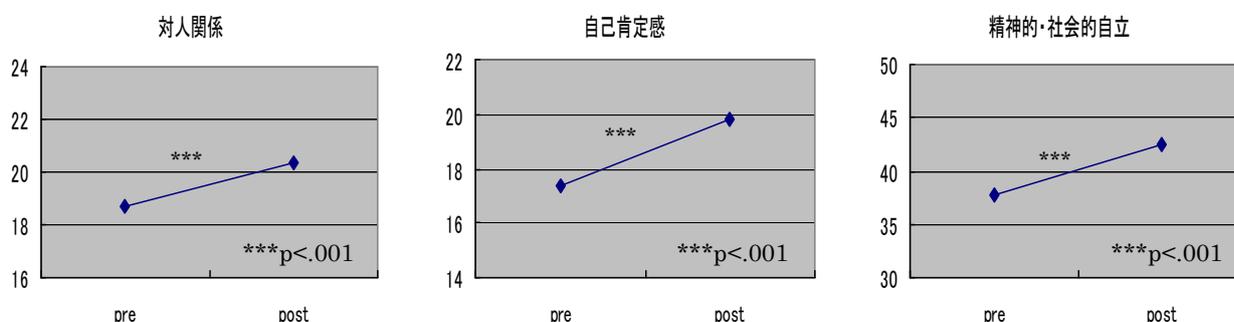


図2 グループごとの平均値比較の結果

図2からも明らかなように、すべてのグループにおいて平均値が向上している。したがって、参加者の対人関係や自己肯定感、精神的・社会的自立の面において、本事業が参加者の変容に影響を及ぼした可能性がある。

[参考文献]

板津裕己 生き方尺度・心理測定尺度集 サイエンス社 p417-421

(2) 成果と課題

《成果》

- ・今年度目標の40名を超える44名の参加者があり、全員が24時間のカリキュラムを修了し「自然体験活動全体指導者」として登録することができた。
- ・事前事後アンケートによる事業評価からも明らかなように、他者との関わりを大切にして誠実な心で接すること、自己肯定感が高まり自分を大切にすること、精神的にも社会的にも自立しようとする等的心情面で向上がみられた。
- ・企画指導専門職が研修の一部で講師となることによって、専門職としての技術や知識について再確認したり、新しいプログラムを試したりすることができた
- ・講師依頼や学生の参加依頼を通して、周辺大学の教授・准教授とのネットワークを新たに築くことができた。

《課題》

- ・学校等の協力を得ながら、修了者が自然体験活動補助指導者として活躍する場をコーディネートしていかなければならない。
- ・修了者が、この研修をもってすぐに現場で自然体験活動補助指導者として指導に当たるのは難しい。そのため、修了者に対して、スキルアップやフォローアップのための研修を行う必要がある。
- ・本事業で高まった自然体験活動指導者への意欲を継続するための手立てを考え、各種事業へのボランティアとしての参加等、定期的な広報活動を工夫していかなければならない。



実習『学ぼう！いのちの救い方：救急救命講習』



実習『自然体験活動の技術：野外炊飯』